

『贈り物の嘘』

楡井咲歩

あらすじ

画家を目指すのが、自信を持ってないまま配達の仕事をしている遥人。いつも配達を行う家で出会った琴実とのやり取りが日常の唯一の楽しみだった。ある日配達を行うと、返事がなく、琴実の母は入院していたことを知る。琴実の嘘を知った遥人は、琴実に嘘を込めた絵を贈る。

文字数

1 1 枚      2 5 2 6 文字

登場人物

山田遥人（23）配達員

谷川琴実（9）遥人が配達を行う家の住人

谷川恵実（42）琴実の母

佐々木（68）谷川家の隣人

○住宅街

バイクを走らせる山田遥人（23）。

いつものように配達を行っている家

の前でバイクを止める。

インターホンを鳴らす。

遥人「郵便配達です」

インターホンの画面。

琴実「はい」

谷川琴実（9）が玄関のドアを開ける。

遥人「こんにちは」

琴実「こんにちは」

遥人「今日お母さんは？」

琴実「お母さん、今買い物行ってるんだよね」

遥人「そうなんだ。これお母さん宛かな」

琴実「うん、お母さんの」

遥人「じゃあ、ここにはんこお願いします」

琴実「はい」

遥人「渡しといてください」

琴実「うん。ありがとう」

琴実はドアを開けたまま立っている。  
バイクに乗る遙人。

琴実「お兄さんばいばい」

琴実が手を振る。

振り返す遙人。

バイクのエンジンをかけて走り出す。

○アパート・部屋（夜）

帰ってきて、コンビニで買ったお弁当を取り出し、食べる。

部屋の中には絵画、描きかけの絵がイーゼルに立てかけられている。

描かれた絵は鉛筆画。町の風景の絵。絵の前に座る。

横のテーブルには絵画作品応募の紙。

○郵便局（朝）

配達物をバイクに乗せる。

バイクに腰掛けて、エンジンをかける。

○住宅街・谷川家（夕）

インターホンを鳴らす。

ドアが開く。

遥人「こんにちは」

琴実「こんにちは」

琴実が段ボールの上の宛先を見る。

琴実「お母さんのだね」

遥人「今日もお母さんいない？」

遥人は家の中をのぞく。

琴実「お母さん、今日仕事行ってるから」

遥人「まだ帰ってきてない？」

琴実「もう帰ってくると思うけどね」

遥人「そっか。お母さん忙しいね」

琴実「うん。お母さんと二人で暮らしてるか

らね。お兄さんはいつも何してるの」

遥人「お兄さん？別に何も言えるようなこ

とはしてないよ」

琴実「何それ。お兄さんいつも何考えてるか

分からないし、いつも元気なさそうに見え

る」

遥人「それは琴実ちゃんがいつも明るいから  
そう見えるだけじゃないかな」

琴実「そういうことじゃないのに」  
うつむきながら言う。

遥人「……お兄さんね、普段絵描いてるの」

琴実「そうなの？ え、見たい。ねえ、見せて！ 写真ないの」

遥人「写真？ 今仕事だから」

琴実「えーいいじゃん。ちよつとだけ、いいでしょ？」

遥人「分かった分かった。ちよつとだけね」

スマホを取り出して写真を見せる。

これまでで一番上手く描けた町の風景。

琴実「これお兄さん描いたの。すごい」

つぶやきながら絵を見つめる琴実。

琴実「色はないの」

遥人「ん？」

琴実「色、色鉛筆とか絵の具とかで色付けないの」

遥人「これは鉛筆だけで描く絵なんだよ」

琴実「ふーん。そうなんだ。じゃあお兄さん  
いつもこういう絵描いてるんだ」

遥人「うん。色を使った絵は描かないかな」

琴実「ねえ。他にはないの。見たい」

遥人「他？　もう終わり終わり。次も配達あ  
るから、行くね」

琴実「じゃあまた今度来た時だよ。配達頑張  
ってね」

遥人「うん、ありがとう。またね」

琴実「またねー」

バイクを走らせ、次の配達へ。

遥人「こんにちは。郵便配達です」

配達物のやり取り。

遥人「ありがとうございました」

○アパート（夜）

絵画と向き合う。

町の風景を描いた絵。

途中から描く。鉛筆を置く。

まっさらの画用紙に変える。  
琴実の家を撮った写真を机の上に置  
く。鉛筆を持って描き始める。  
手を止めて、ベッドに寝転がる。  
描き上がった絵。

○住宅街・谷川家

インターホンを鳴らす。  
鳴らしても誰も出てこない。  
庭のドアから中を少しのぞく。  
不在票を入れる。

○（次の日）住宅街・谷川家

インターホンを鳴らす。  
鳴らしても誰も出てこない。  
隣の家に訪ねに行く。

○住宅街・隣の家

隣人の佐々木さん（68）がドアを  
開ける。

佐々木「どうしたんですか」

遥人「すいません。谷川さん、昨日もいらっしやらなかったんですが、どこか出かけているとか知ってらっしゃいますか」

佐々木「あー。谷川さん、今入院してらっしゃるって聞いてますよ」

遥人「え。入院ですか。そんなわけ、ないですよね。だって、この前も琴実ちゃん、お母さんは仕事に行ってるって言ってましたよ」

佐々木「もうお母さん入院してだいぶ経つはずですよ。琴実ちゃん、たまにうちに遊びに来たりもしてましたし。今、お母さんの病院に行ってるんじゃないかな」

○アパート（夜）

帰ってくる。床に座る。

○（回想）谷川家・玄関前

遥人「今日お母さんは？」

琴実「お母さん、今買い物行ってるんだよね」

○（日があいて）谷川家・玄関前

遥人「今日もお母さんいない？」

琴実「お母さん、今日は仕事行ってるから」

（回想終わり）

○アパート（夜）

遥人 M「すごい元気で明るかったのに。何で

気づかなかったのだろう」

部屋の中を探し、水彩絵の具を取り出す。

イーゼルの前に座る。

絵を描き始める遥人。

○病室

母・谷川恵実（42）のベッドの前に座る琴実。

琴実「今日ね、郵便配達のお兄さんの絵見せてもらったんだ」

母「そうなの。それ、お母さんも見たいなあ」  
琴実「琴実だから見せてもらったんだよ」  
母「じゃあ、早くお母さんも元気にならない  
とね」

○住宅街・谷川家（朝）

絵を入れた箱を玄関のドアの前に置  
く。

○住宅街（昼）

遥人 N「そのあと、琴実の家への配達はしば  
らくなかった」

毎日の配達を行う日々。

○谷川家（夕）

琴実とお母さんが家に帰ってくる。

琴実「あれ、これなんだろ」

母「配達の荷物？　こんなところに置かない  
よね」

琴実はその箱を見る。

琴実「何も書いてないよ」

母「何だろね」

ドアの前に置いてある箱を持って家の中に入る。

箱の中を開ける。絵を見る二人。

琴実・母「わあー」

柔らかい色味で描かれた琴実とお母さんの絵。

琴実「すごい。すごい。好き。この絵」

母「すごいね。素敵」

琴実「あ」

母「どうしたの」

琴実「お兄さん、前に色を使った絵は描かないって言ったのに」

琴実が遙人に向けて手紙を書く。

○アパート（夜）

帰ってきてポストを開ける。

中に入った手紙。

封筒を開ける。

○手紙

「配達員のお兄さんへ。

絵ありがとう。お兄さんの絵みてお母さんがすてきって言ってたよ。またかいてね。配達まっています。

琴実「

遥人「あ」

手紙には鉛筆で描かれた遥人の似顔絵。

○住宅街・谷川家

数日後、久しぶりの配達。

インターホンを鳴らす。

遥人「郵便配達です」

インターホンの画面。

琴実「はい」

ドアが開く。

琴実が微笑む。遥人の笑顔。玄関には絵が飾られている。

(了)